

# タスク実行データにおける日本人英語学習者の描写・叙述能力の分析

和泉 絵美 井佐原 均

独立行政法人通信総合研究所 / 神戸大学大学院自然科学研究科

## はじめに

近年、日本の英語教育において、コミュニケーション・アプローチの主流化が急速に進んでいる。現在実施されている文部科学省「中学校学習指導要領」の冒頭にも、「目標：外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」[1]と掲げられている。このような、実際の使用場面で役立つ英語能力の習得には、従来英語教育の現場で行われてきた文法説明や語彙暗記中心の学習のみでは不十分であることは明白である。それらの文法項目や語彙を、実際の場面で使用できるレベルにまで定着させるためには、まずは学習者が、教室においてそれらを使用することを要求されるような学習活動を行うことが必要となる。その中心として挙げられるのが、「タスク中心型学習(Task-based Language Learning)」である。教師側にとっても、生徒にタスクを実行させることにより、彼らが実際の使用につながるような習得をしているかどうかを、従来の短文穴埋め問題や訳出といった文法指導中心の活動に比べ、より明確に判断することができる。

我々が構築した日本人英語学習者コーパスの中にも、「イラスト描写」「ロールプレイ」「コマ割りイラストへのストーリー付け」の3種類のタスクを実行する発話データが納められている。本研究では、それらのうち、風景の描写および風景と人物や動物の動作の関係の叙述能力を測る「イラスト描写」タスクの実行データを対象に、日本人英語学習者の描写・叙述能力の分析を行う。分析に先立ち、まずは再度タスク中心型学習・教育の目的を理解し、次に描写・叙述にはどのような言語運用能力が必要となるかを考える。そして、実際のデータ分析においては、データに付与されている各学習者の習熟度レベル情報を利用して、描写・叙述タスクにおける学習者言語の発達段階について考察する。また、英語母語話者のタスク実行データとの比較を行い、日本人学習者の描写・叙述能力を総合的に評価する。

## 1. タスク中心型学習

これまでに様々なタスクの定義がなされてきているが、そのどれにも共通するのは、タスクのようなコミュニケー

ション活動は、学習者がメッセージ伝達 (message conveyance) の達成のために、どのように学習言語を使用するのかをよりはっきりと反映するものである、ということである。これは、「正確であること」に重きを置く文法説明中心の学習活動との比較によるものである。タスク中心型教育においては、正確であることよりも、いかにうまくメッセージを伝達するか、が優先される状況における言語のサンプルの提示が行われる。つまり、実際のコミュニケーションの場で必要とされる言語運用能力を身につけるのに、タスク活動は良い訓練となるのである。[2]

また、教師や研究者にとっても、タスク中心型教育は、学習者言語の発達段階の観察において有用であるため、しばしば習熟度チェックテストへのタスク型問題の導入が行われている。今回の分析で使用するタスク実行データも、スピーキング能力を測るインタビューテストの一部分である。

## 2. 描写・叙述タスク

本研究で分析の対象とするイラスト描写タスクでは、示されるイラスト内に描かれている情景・人物・事物などを局所的・総合的に描写し、聞き手にいかにうまく伝えるかがポイントとなる。まずは、情景の中の静止物の位置や配置の描写を行うことが中心となる。それに加え、人物や動物の動作・行動を描写する必要もある。また、それぞれの事柄を局所的に単純描写するだけでなく、情景と人物・動物の動作との関連を物語風に叙述して、イラストを総合的に描写したりすると、表現全体の幅が広がり、評価も高くなる。こういった描写・叙述タスクは、意見の主張や議論と比べると、初歩的で、平易な言語運用だと言えるだろうが、学習者の基礎的な語彙運用能力を把握するのに役立つ。実際に、このタスクは、インタビューテストの中で一番最初に行われ、試験官はこのタスクを受験者がどの程度こなすことができるかを見ることにより、それ以降受験者に提示するタスクの難易度を判断している。

分析に先立ち、比較のために用意した英語母語話者データに目を通したところ、事物の描写に特有の定型表現が多く使われていることが分かった。

- 存在を表す言い回し  
there are/is ..., it is ..., this is ..., I see ...
- 位置を示す言い回し  
next to ..., on the ..., above it ..., on top of ...,  
in front of ..., in the upper left-hand corner,  
in the foreground/background

また、これらの直接的に描写するための表現に加えて、発言の内容に自信がない場合に、ためらいがちな表現を入れたり、イラストの背景事情について推測するための表現を混在させている例も多く見られた。これによって、単調になりがちな描写が、全体的に変化に富んだものになっている印象を受けた。そのような表現を以下に示す。

that seems to be a ..., this looks to me like ...,  
I don't know, but I could be wrong,  
I bet ..., I'm guessing ... because ...

また、これはあまり描写・叙述表現に特化したことではないが、発話に詰まったとき、例えばイラスト内の事物の名称を忘れた、もしくは知らない場合、学習者が習得しておけば便利であろうと思われる以下のような表現も見受けられた。

something I don't know what it is.  
what was that called?  
I don't know much about ...

外国語習得において、個々の語彙の習得や、それらを自己流に組み合わせることよりも、定型表現そのものを習得することが、非ネイティブ的な英語からの脱却のためにつながることはよく知られている。英語母語話者データに、先に挙げたような定型表現が多く含まれていることを考えても、特に、今回のようなタスク活動においては、いかにそのタスクに適した定型表現を使いこなせているかが、母語話者に近い描写・叙述を行えるかという言語運用能力の判定のポイントとなると考えられる。しばしば、学習者はあまり定型表現等の連語を使わず、単語の勝手な羅列によって発話を構成するといわれるが、このデータにおいてもそのような傾向がみられるのかどうか、調査することにした。

そこで、本研究では、まず量的な分析により日本人英語学習者と英語母語話者の連語の産出比率の比較を行い、学習者がどの程度決まった連語を使用しているか調査する。ただし、学習者が母語話者は使わないような連語を頻繁に使用していることも十分考えられるため、英語母語話者、学習者のそれぞれが頻繁に使用する連語のうち上位のもの

の個別に観察し、考察を行う。

### 3. 分析対象データ

使用するデータは、通信総合研究所において2000年より3年間で構築した日本人英語学習者コーパスの一部である。本コーパスは、試験官一名・受験者一名で行われる15分のインタビューテストの書き起しデータ1201件から構成されている。受験者の年齢層は大学生・社会人が大半を占める。インタビューの中で、受験者は、自己紹介などの自由な発話のほか、はじめに、で述べた3種類のタスクを行うことを要求される。本研究では、「イラスト描写(7パターン)」のデータを分析の対象とする。受験者は7パターン用意されているイラストのうち、1パターンを提示され、描写を行う。

また、1201件それぞれに、受験者の習熟度レベル情報が付与されている。これは、2~3人の審査官によって、9段階にレベル分けされた結果である。審査においては、総合的タスク・機能(言語を使って何ができるか)、話題・状況(どのような状況で何について話すことができるか)、テキストの型(どんな構文や構成を使うことができるか)、そして、タスク中心型学習の命題でもある、どれだけ発話をきちんと聞き手に伝えることができるか、といった項目が目ざされる。[3] このレベル情報は、日本人学習者をひと括りにするのではなく、段階的な言語運用の発達状況を分析するのに役立つと考えられる。書き起こしテキストには、フィルター・言い淀み・言い直しなどの基本談話情報を示すタグも付与されている。

また、今回は、比較のために、2. で述べた英語母語話者の発話データ40件も用いる。これは、英語母語話者に、日本人学習者と全く同じタスクをこなしてもらい、それをまた学習者データと同じように書き起したものである。学習者データとの規模の差が大きいため、比較対象として必ずしも適しているとはいえないが、同様の状況下での発話データという点で、表現の違いを無理なく比較するには有益だといえる。

### 4. 学習者データの分析

#### 4.1 データの分布

表1に、今回の分析に用いる学習者データ1201件および英語母語話者データ40件に関するレベル別内訳や、総語数・総文数を示す。

先にも述べたように、元のコーパスデータには9段階別の習熟度レベル情報が付与されているのだが、データ収集の際、受験者のレベル分布の平均化は行わなかったため、中級であるレベル4にデータ数が集中した。逆に、最低レ

ベルのレベル1や、最高レベルのレベル9のデータが極端に少ない状態である。本研究では、9段階ではなく、レベル1~3を初級、レベル4~6を中級、レベル7~9を上級とし、3クラスに分けて調査を行う。また、ここで示されている文字総数・語総数は、フィラーや言い淀み・言い直しを除いた数である。

レベル	件数	語数	文数
学習者初級	262	9757	1856
学習者中級	846	62899	8597
学習者上級	93	9403	1094
母語話者	40	5691	567

表1 分析対象データの内訳

最初に、本コーパスのレベル情報の信頼度を、簡単に各学習熟度レベル間の学習者一人当たりの発話量や流暢さの推移を通して示す。(表2)

レベル	平均発話語数	文の平均長	言い淀みの比率
学習者初級	37.2語	23.19文字	0.11
学習者中級	74.3語	42.24文字	0.09
学習者上級	101.1語	48.44文字	0.04
母語話者	142.27語	53.75文字	0.02

表2 平均発話語数・文の平均長・言い淀みの比率

ここでの平均発話語数も、表1の発話語数と同じく、フィラーや言い淀みを除いたものである。語学習得において、書く、もしくは話す力の発達は、まず産出のべ語数の増加に現れると考えると、平均発話語数がレベルが上がるのに比例して増えているのは納得ができる。また、難しい文構造を使えるようになるのにしたがって、文の平均長も増加していることが分かる。言い淀みの比率の減少は、レベルが上がるにしたがって発話に無駄がなくなり、流暢になってきていると判断できる。

#### 4.2 タイプ・トークン比による連語使用の調査

最初に、学習者が描写発話の中でどの程度連語を使用しているかを調査する。まず、学習者データおよび英語母語話者データのn-gram解析により得られた2語~5語の連語から、2語の場合は10回以上、3語5回以上、4語4回以上、5語3回以上それぞれ出現するものを切り出し、連語のタイプ・トークン比を求めた。[4]グループによってデータの規模にばらつきがあるため、表2から5で示されているトークン数とタイプ数は、最も小さなグループである母語話者の語数5691語を基準とした場合の数字となっている

	tokens	types	Log type/token比		tokens	types	type/token比
2語	1812	76	0.58	2語	3096	86	0.55
3語	881	92	0.67	3語	1712	128	0.65
4語	342	54	0.68	4語	822	101	0.69
5語	188	44	0.72	5語	444	90	0.74

表3 学習者初級

表4 学習者中級

	tokens	types	type/token比		tokens	types	type/token比
2語	2364	114	0.61	2語	727	36	0.54
3語	1023	125	0.70	3語	351	57	0.69
4語	333	60	0.70	4語	78	21	0.70
5語	119	33	0.73	5語	9	3	0.50

表5 学習者上級

表6 英語母語話者

これから見て取れるように、全体的に英語母語話者に比べて、学習者は同じくらいか、少し多くの連語を使う傾向にあることが分かる。特に、語の組み合わせが長くなるとその傾向が顕著に現れる。つまり、学習者は少なくとも何らかの連語を一定量使用し、必ずしも、その都度、語をばらばらに組み合わせで発話しているわけではないということである。しかし、少し違った方向で考えてみると、学習者は母語話者が産出しない、または頻繁には使用しないような連語を過剰に使用しているともいえる。学習者がどのような連語が過剰に使用しているか、また反対に、英語母語話者が頻繁に使用するのに、学習者はあまり使用していない連語(過少使用)を把握することも学習者言語の分析において重要である。また、今回のような決まったイラストの描写だけだと、それに適した表現群をよく知っている英語母語話者の連語パリエーションが、その範囲を超えることなく、抑えられてしまったため、タイプ数が減ったとも考えられる。このことは、表7に示されている単語レベルでのタイプ・トークン比からも推測できる。母語話者のタイプ・トークン比は一部のレベルの学習者のそれよりも低い値になっている。

	tokens	types	Log type/token比
学習者L1	33	26	0.93
学習者L2	590	195	0.83
学習者L3	9134	960	0.75
学習者L4	30370	1606	0.72
学習者L5	20495	1437	0.73
学習者L6	12034	1161	0.75
学習者L7	5373	767	0.77
学習者L8	2928	598	0.80
学習者L9	1102	317	0.82
母語話者	5691	933	0.79

表7 レベル別単語のタイプ・トークン比

次に、学習者データ・母語話者データから抽出された実際の共起頻度リスト(3-gram)のうち、上位20位までのもの(表8)を見てみると、学習者が、2.で挙げたような、ものの存在や位置などを示す描写表現を、早い段階からある程度使用できていることが分かる。

学習者初級			頻度	学習者中級			頻度
there	is	a	85	there	is	a	483
and	there	is	46	and	there	is	275
on	the	bed	39	in	front	of	205
door	is	open	22	and	there	are	186
on	the	desk	22	front	of	the	112
cat	on	the	21	this	is	a	109
the	door	is	21	i	think	this	103
cat	is	sleeping	20	and	i	think	90
is	on	the	20	cat	is	sleeping	87
in	front	of	19	i	don't	know	86
sleeping	on	the	19	on	the	bed	86
this	picture	is	19	sleeping	on	the	85
and	there	are	18	is	sleeping	on	84
cat	is	on	16	and	they	are	75
the	bed	and	16	and	a	man	73
the	cat	is	16	there	are	many	73
a	cat	on	15	there	are	two	73
a	dog	and	15	a	dog	and	71
a	man	is	15	and	on	the	69
and	she	is	15	and	she	is	69
学習者上級			頻度	英語母語話者			頻度
there	is	a	58	it	looks	like	27
in	front	of	36	there	is	a	20
and	there	are	29	in	front	of	14
and	there	is	29	seems	to	be	12
this	is	a	25	and	there's	a	10
front	of	the	22	front	of	the	10
i	don't	know	20	looks	like	a	10
the	teacher	is	15	a	lot	of	9
and	i	think	14	i	don't	know	9
of	the	house	13	in	the	back	9
seems	to	be	13	looks	like	he's	9
there	are	two	13	next	to	the	8
and	on	the	12	on	top	of	8
i	think	it's	12	the	train	station	7
listening	to	the	12	top	of	the	7
one	of	the	12	and	there	are	6
she	has	a	12	in	the	background	6
i	think	this	11	there	are	some	6
is	listening	to	11	to	be	a	6
and	the	other	10	a	snowball	fight	6

表 8 学習者および母語話者データにおける上位共起頻度語

“there is/are...” のような直接的にももの存在を表す表現は、初級者のうちから多く使用されている。ただ、初級者においては、“door is open”, “cat is sleeping”, “cat is on (the bed)” のような、「A は B だ」とか「A が B している」といった、目に入った事物を主体とする、平易かつ単調な表現での描写が多くなりがちのようである。中級者以上になると、直接的な描写表現の前に “I think ...” のような言い回しを付け加えることによって、単調さを回避しようとする方略を行うようである。このような “I think” や “I guess” といった、文頭や文末に付け加えるだけで、単調さや直接的すぎる表現に含みを持たせることのできる表現を身につけることは比較的簡単なようだが、英語母語話者の頻度上位にある、“it seems to be ...” や “it looks like” のような、tentative さを加えるために、最初から文を組み立てる必要のある表現の習得はなかなか難しいようである。“seems to be” も “look like” も学校での文法指導ではよく出てくるものであるし、ごく簡単な定型表現であるので、こういったタスク活動を通して、実際の使用例を身につけることが重要であると思われる。

## おわりに

本稿では、習熟度レベル情報付きの日本人英語学習者によるイラスト描写タスク実行データを用い、英語母語話者データとの比較を中心に、学習者の描写能力についての調査を行った。英語母語話者との連語タイプ・トークン比の比較により、日本人学習者は、予想に反して連語、それも長めのものを英語母語話者並みに、もしくはさらに多くの種類の連語を使用していることが分かった。また、上位共起頻度語の観察により、初級レベルでは直接的表現が多く単調になりがちであった描写表現が、レベルが上がるにしたがって、いくつかの tentative さを加える表現を身につけていくことが分かった。今後は、今回の連語タイプ・トークン比分析によって得られた結果を更に深めるために、英語母語話者に比べて学習者の過剰に使用している連語、反対に過少使用している連語を抽出することによって、このようなタスク活動の指導に役立てられるような知見を得ることを目標としたい。

備考：

本研究で使用した日本人英語学習者コーパスは 2004 年春ごろを目処に通信総合研究所より一般公開されます。

## 参考文献

- [1] 文部科学省、1998 年「中学校学習指導要領」12 月。
- [2] Ellis, Rod. 2003. Task-based Language Learning and Teaching. Oxford University Press.
- [3] 早稲田大学オーラルコミュニケーション研究所研究報告書。1998。「英語スピーキング能力テスト SST とは何か」
- [4] Granger, Sylviane (ed.). 1998. Learner Language on Computer. Longman.